



2017年6月23日

FRBは6月14日のFOMCで、政策金利の追加利上げを決定しました。

これにより、政策金利が1.0-1.25%に引き上げられましたが、市場では既に織り込み済みだったこともあり、直後のドル円の値動きは落ち着いたものとなりました。

FOMCの声明文では、労働市場は堅調で、失業率が低下していると指摘されました。

一方で、目先のインフレ率に対しては、やや懸念を表明することとなりましたが、中期的には目標である、2%近辺で安定するとの予想は維持されることとなりました。

また、FRBが利上げ以外にバランスシートの縮小に関して、具体的な方法を発表したことにも多くの注目が集まりました。

過去に遡ると、リーマン・ショック直後にFRBは金融緩和策として、政策金利をほぼゼロまで引き下げ、債券を購入する量的緩和(QE)を行いました。これは「非伝統的政策」とも呼ばれます。

この政策自体は2014年10月に終了しましたが、FRBはその期間に購入した債券をその後も保有し続けており、債券を保有し続けることでバランスシートの規模を維持する狙いがありました。

しかし、ここ数年の米国経済の復興を受けて、極端な景気刺激策が必要ないという判断から、FRBは2つの事を行うことで金融政策の正常化を進めました。その一つが利上げで、もう一つがバランスシートの縮小です。

バランスシートの縮小に関しては、債券市場に影響を考え、慎重に事を進めようとしています。そのため、当面は債券を売却せず、満期償還された債券の再投資を停止することで残高を漸減させる方針です。

再投資の停止は、月間100億ドル(米国債60億ドル+住宅ローン担保証券40億ドル)で開始し、3カ月ごとに100億ドルずつ上乘せしていき、月間500億ドルになるまで増加させるとしています。

現在のバランスシートは約4.5兆ドルになっており、リーマン・ショック前のバランスシートは1兆ドル弱だったため、当時に比べて経済規模が拡大し、適正なバランスシートの規模が拡大していることを考慮しても、正常化には長い時間がかかるとみられています。